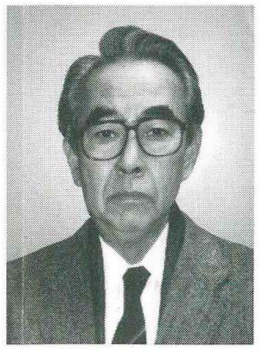
高山の文化を高めた人々 39

彫刻と昆虫研究に尽した 鳥飼兵治

日影 義朗

鳥飼兵治先生が高山市立第三中学校に赴任された時に、「僕はね、人から『奇人変人』と言われるんですよ」と豪快に笑われたことを今でもよく覚えています。

木製飛行機を設計するため、神戸から移住して飛騨産業に勤務されるも、やがて終戦を迎え失業。その後、教師となって教壇に立つようになっても、暇さえあれば昆虫採集のために野山へ出かける姿を見て、人々は『奇人変人』と表現したのだと思います。



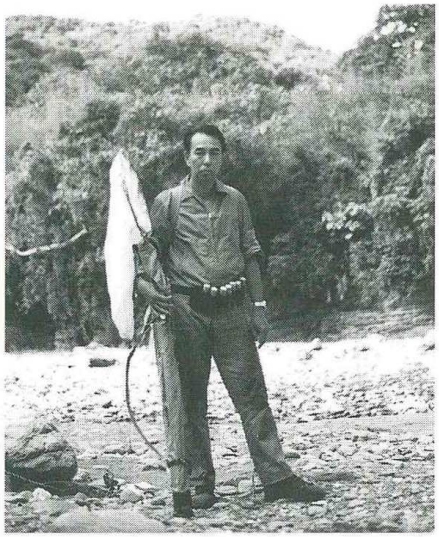
教師として

昭和五十年頃までの教師像を語る時、豪放磊落な人物像が語られることが度々ありますが、その典型的な一人に先生も該当されるのではないかと思います。夏休みに子どもたちと一緒に虫を採り、その種の豊富さに驚歓したのが、先生の生涯を決定づけました。「飛騨は日本のアフリカ、未調査・未発見の昆虫の宝庫」と確信されたのも、子どもたちとふれあった体験が大きく影響していると思います。

先生は後年、彫刻の世界に入られましたが「面白いね、楽しいね」と、子どもたちと競いながら木を削る中で、内なる感性のおもむくままに数々の作品を生み出し、次第にその才能を開花させていきました。そこには、常に先生の飽くなき探究心と挑戦的な冒険心があり、さらに、その根底には子どもたちと共に学び、喜びと感動を分かち合おうとする姿勢があったのだと思います。

昆虫学者として

「このあいだ、山の中でハブに出会ってしまってねぇ」と豪快に語られた先生。退職後は、もっぱら台湾や東南アジアに採集の地域を広げ、特に自然破壊の進む地域での生態系の研究等のため、さらなる昆虫採集の旅を続けられました。



先生の採集コレクションは、何万匹にものぼります。飛騨地方独特の「コメツキダマシ科」の甲虫のほか、先生の名前が付けられ、海外にも広く知られている「トリガイ・ビコロール」や「ドウラペスト・トリガイイ」をはじめ、十数種の新種を発見されています。また、日本昆虫学会員や飛騨自然保護協議会会長としても、精力的に活動されました。

彫刻作家として

先生は、子どもたちと一緒に木を彫っている間に、内なる感性が触発され、さらに制作意欲が沸いていったのだと思います。作品のモチーフは、常に脳裏から離れることのなかった昆虫であったことは間違いありません。迷わずに昆虫の独特な形をイメージして作品づくりに打ち込まれました。その作品が二科展に入選し、二年目には栄ある特選作品「スカラベ」を生み出します。以来、二科展には十一回連続して入選されました。

昭和五十三年頃から先生の作品が変化を見せ始めます。従来の昆虫的なモチーフから、無機質な純粋抽象的な作風に移行し始めました。しかし、その追求が未完のまま、評価の段階に至る前に逝かれてしまったのではないかと思います。鳥飼作品を楽しみにしていた者にとっては残念でなりません。

＊

今、あらためて先生のことを思い浮かべると、教師として教壇に立つ姿、昆虫学者として研究に没頭する姿、そして彫刻作家として鑿を振るう姿が重なります。これこそが「みんな私のことを『変人奇人』と言うんですよ」と豪快に笑われた、ありし日の先生の生き様そのものだったと思えるのです。同時に、その持てる能力が未完のまま、病床に伏された先生ご自身の無念さは察するに余りあります。

昆虫学会の同人、二科会の会員、そして多くの教え子たちから慕われ惜しまれながら、平成十七年十二月二十七日、八十五歳で永眠されました。

先生の研究成果である貴重な昆虫標本の数々は、今も「大阪市立自然博物館」と、市内千島町にある「まつりの森別館・昆虫館」において、大切に保管展示されています。